



いつでも どこでも ホスピスケアを!!

<http://www.normanet.nc.jp/gun-hosp/>

第63号

発行  
群馬ホスピスケア研究会  
責任者 土屋 徳 昭  
事務局 高崎市北久保町10-9  
(吉本宅)

☎・FAX 027(353)1341

e-mail asa8025491@yahoo.co.jp

☎・FAX 027(323)5824

e-mail SNB32318@nifty.com

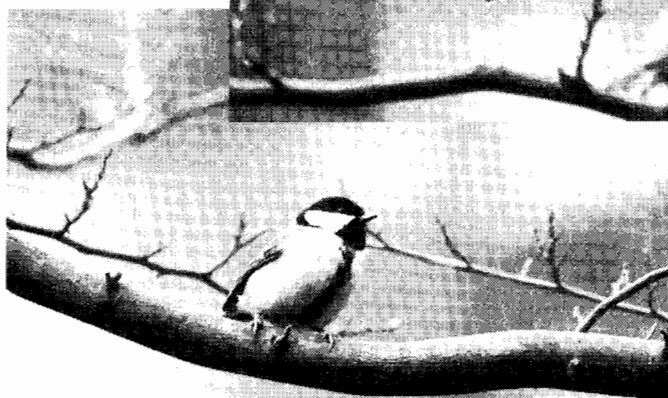
印刷 松本印刷工業㈱

前橋市紅雲町1-12-3

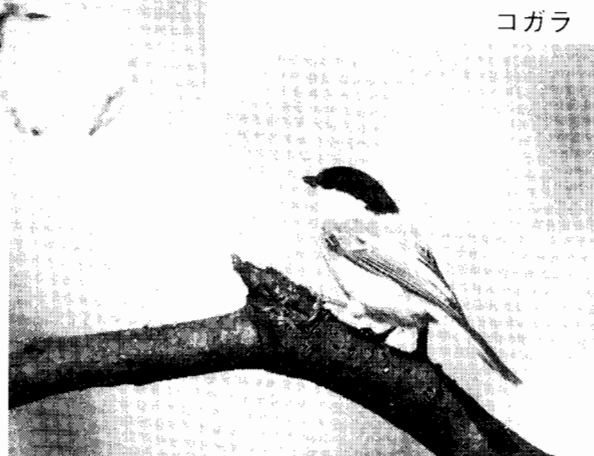
☎ 027-221-5015



ヤマガラ



シジュウカラ



コガラ

撮影者：前橋市 小平 享  
場 所：前橋市嶺公園



## 目 次

シンポジウム 現代葬儀事情 ～自分らしい最期をデザインするために～…………… 2～6

「みんなありがとう、これから仏の世界に行くよ・・・」…………… 7

グラフ 西群馬病院緩和ケア病棟ボランティアだより …………… 8～9

私は今も、こうして私らしく生きている ～関口秀子さんのお話～ …………… 10～13

手記 最愛の娘を亡くして思うこと 森上彩子 …………… 14～15

これからの「分かち合いの会」日程／寄付のお願い／編集後記 …………… 16



本会主催 ホスピスセミナー

2007.11.17(土) 高崎市総合福祉センター

## シンポジウム 現代葬儀事情

～自分の最期を自分らしくデザインするために～

竹内 功さん(NPO法人一功会)・服部順空さん(円龍寺住職)

### 竹内 功さん

人というのは生を受けた以上、亡くなるのは自然の摂理です。巷で「俺はもう歳だから先がないよ」とかいう声を聞きますが、私はそうは思いません。若くても事故や病気や犯罪等に巻き込まれて亡くなる人もいます。それが人間に与えられた宿命あるいは運命というものではないかと思っています。誰でも命あるものは最後があるのです。皆さんは、その最後をどう迎えたいか、自分なりの希望・要望があるのではないかと思います。そうした中であって、およそ4・50年前の葬儀はどうであったか、その変遷を辿ってみたいと思います。

私は、本町(高崎市)のブリエッセで生まれ、育ち、現在68歳になりますが、葬儀内容については今までに見たり、聞いたりしてきたことがたくさんあります。それらの中から、そのいくつかをお話してみたいと思います。

霊柩車にはお宮型と外車型があり、現在は後者の型が多くなっています。私は、ずっと以前からこの仕事に携わって色々見てきましたが、お宮型の方が安価だし、よいと考えています。お宮型はどこがどう違うのかと言うと、「輿」といって昭和初期から使用されているものが前進です。昔「輿」は、身分の高い人を乗せた乗り物でした。「輿」の形の中には四面に豪華な屋根つきの素晴らしいものがあります。それはみな座って乗ります。一人として寝る人はいません。当時は、火葬よりも土葬が主流でした。棺も今は寝棺が主ですが座棺が殆どでした。幅が1尺6寸(52.8センチ)、縦が1尺4寸(46.2センチ)という極小型なものでした。板が3枚貼ってあって、そこに穴を開け、遺体を入れて担ぐもので、昔の棺桶屋で見られた丸いものではなく、四角いもので、隣保班の人たちがお墓まで担いで行ったものです。その座棺の片側に被せてあるのを輿と言ひ、お宮型のとても綺麗なものです。今の霊柩車のお宮型と同じです。私は昭和15年生まれですが、私が小学校に入る頃までは、職人が15名ほどいまして、人が一人亡くなると、そうした輿を一個作ったものです。それで地域の皆さんに協力していただいて、穴を掘る役、輿を担ぐ役などそれぞれ

れ役割がありました。それに対して昔は今のような祭壇は設けなかったもので、棺をお寺の本堂に安置してご住職に拝んでもらって出棺するというスタイルでした。

今は全くといってもいいほどなくなってしまいましたが、当時、葬列とも隊列ともいう風習がありました。行列の一式をなしたその中に天蓋というものがあって、まさにこの天蓋がお宮なのです。その棺を覆う輿なのです。お寺の本堂に行きますと天蓋がぶら下がっているのを見たことがあると思いますが、お寺さんの本堂の中心は仏様が通る道なのです。ですから一般の人はそこを歩いてはいけません。必ず、その上に天蓋があるのです。そこに葬儀の原点があるのではないかと思います。いま時代の流れでどうしてもハイカラになりがちですが、私は疑問に思っています。

現在は葬儀並びに告別式等と言って、一緒にやるケースが殆どですが、本来は葬儀と告別式は別のものです。葬儀は簡単に言うと、宗派の特徴ある儀式をしていただいて仏様に引導渡しをして送ってあげるものです。告別式は、一般の方へのお別れの儀式であって、それ以上の深い意味はありません。今、お別れの会とか偲ぶ会などと形容して行われていますが、葬儀の原点を見失わないようにして欲しいと思います。

葬儀を出すということに関しましては、一人ひとりの考え方があって、今流行しつつあるのが、俗に水葬と言うのでしょうかご遺骨を海に流すというのがあります。また、ご遺骨を墓地に埋葬するという葬法があって、この二つの葬法が主に行われているものです。殊に墓地を作ってご遺骨を埋葬する葬法は日本の葬儀の伝統なのです。平安時代の藤原道長の時代から遺骨信仰があったのです。この信仰が日本人の原点であると思っています。ですから、遺骨を海や川に流すというのは、欧米諸国の影響があるように思います。

昔、平安時代には人が亡くなっても遺体をそのままにするという嫌な時期があり、京都では遺体がそこそこにゴロゴロしていたということです。人が亡くなるということにあまり関心がなかった時代があったようです。このことに目覚めさせてくれたのが、高野山の高野聖と言われた身分の低いお坊さんたちです。そのお坊さんたちがそれらの遺骨を全部集めて高野山に持って行き、供養したのです。そうしたことが遺骨信仰の原点ではなかろうかと思っています。それで、遺骨を埋葬する遺骨信仰が、葬儀としてはベストではなかろうかと私は思います。

昭和43年頃は、高崎にも座棺ではなく寝棺でしたが土葬がありました。ただ今は、火葬条例によって土葬は全面的に禁止されています。私が今、この葬儀に関して憂慮していることがあります。それは、人が一人亡くなると、色々



なパーツがつきます。七本塔婆とか六角塔婆とか松明とかです。それらを東京近辺では、全部省略してしまっています。位牌一本で葬儀を行うお坊さんが増えているのです。これは、葬儀の原点が見失われていて良くないことだと思います。「竹内さん、この鉛筆みたいのはなんだい」などと、聞かれることがあります。七本塔婆とは何か、六角塔婆とは何か説明してあげるのが我々葬儀に従事する者、あるいはお寺さんの役目ではないかと思っています。

七本塔婆というのはお寺さんに経文を書いてもらった七本の塔婆のことで、墓地に置いて来るのです。土葬のときは、土中に打ち込みました。一本が七日、七×七＝四十九日で、その間、七日七日に墓直しと言って、全親族が行って、お墓を直したのです。一週間終わると、塔婆を一本折って打ち込み、それを七回して四十九日、しっかり墓をまててくるのです。

私は講演のときに必ず話すことがあります。それは文化の中心は葬儀にあるということです。宗教というと抵抗ある人も、葬儀というといくら受け入れてもらえることが多いです。最近葬儀に見られる傾向に、よく無宗教で、あるいは密葬で葬儀を出したいという人がいます。しかし、無宗教という宗教はありません。無宗教という発想は、生と死の因縁を全く考えない人がいう言葉のような気がします。最近散骨などと言って、海に骨を撒いてしまう人がいますが、おかしいことだと懸念しています。また、宗教離れという言葉がありますが、自分で離れようと思っても人間は宗教を離れることはできません。葬儀というのは昔も今も携わる人がしっかりしていないと、滅茶苦茶になってしまいます。お寺さんにもっとしっかりしてもらえば、世の中ずっと良くなると思います。

### 服部順空さん

今回のお話のタイトルは、かなりストレートでもすると深刻になりがちですが、ホスピスの会に来て、いつも綺麗なお花が飾られていてとても心が和みます。葬儀の場にこのお花がなかったらどうなのだろうと考えますと、花があることによって、人の心が和んでくる、安らいでくるということもあると思います。今日の会を扱っている内容は深刻かもしれませんが、こうした花を見ながら、一人でも多くの人が心と和み、安らいでいただき、これから葬儀をどう作っていったら良いのかということでお話を進めて生きたいと思っています。

今、自分が僧侶として葬儀にどう取り組み、どう行っているかお話ししたいと思います。

一つお話の前にお断りしておきたいのは、私がこれからお話しすることは、全てのお坊さんや宗派に通用するということに思わないでいただきたいと思います。各宗派、一人ひとりのご住職というのは、会社の社長のようなもので、それぞれが独立して、それぞれのポリシーを持ってやっていますので、全てに共通するものではなく、富士見村の住職の考える形だとしてご理解いただき、受け止めていただければ幸いです。

### 1. いのちは消滅するか(儀式的な前提として)

人が亡くなってから法を説いても遅いなどのご指摘されることがありますが、私が思うには、この人の肉体は死んだかもしれないが、死んではないと確信して、儀式に望んでいます。

#### ① 仏教の生命観～直線ではなく円環

仏教では人間の命というのは、赤ちゃんが生まれた点から息を引き取る地点、この誕生と肉体の死という直線というわけではありません。私たち人間の魂のふるさとというべき場所、仏教であれば浄土あるいは極楽、キリスト教であれば、神の国に肉体を持たない存在としての人生に、ご縁を持って肉体を持って生まれてくると考えています。人生は修行の場であるといわれるように、一生の人生を通して肉体に宿った魂を磨いていくのです。誰しも借りた肉体というのは、終わるときが来ます。終わったときには、借りた肉体はこの世に返して、土葬あるいは火葬をして土に還っていくのです。そして、肉体に宿った魂は、元いた魂のふるさとに戻るのです。ですから、命というのは肉体の死を持って消滅してしまうものではなく、元いたふるさとへ帰っていくような円を描いて、その円が繰り返して行われるので、これを輪廻転生といっています。これがちょうど魂が螺旋階段を上るときのように人間に生まれ、また極楽浄土に行くのを何度も繰り返してより高いところへ上っていく、これが私たち人間の命のあり方ではないかと理解しております。ですから葬儀の儀式というのは、その元いたところへ帰っていく魂を如何にお送りできるかであると思います。

#### ② 臨終＝往生・帰郷・卒業

臨終という言葉があつて終わりに望むということですが、これは決して終わりではないのだということです。様々な言い換えができますが、一つには往生、これは浄土教の中で言われることですが、人間の命は仏の世界へ入っていくのだということです。往生という言葉は、浄土へ行って仏として誕生することで、死んで命が消滅するということではないのです。

帰郷とは、先ほどお話したように、魂のふるさとへ帰ることです。私自身はこの帰郷という言葉の表現がピンとくるものがあつて、自分にとってぴったり来ます。この帰郷という言葉で印象に残っている話があります。それはキュープラロス女史の著書の中にあつたエピソードですが、5歳の脳腫瘍になって亡くなっていく子が、臨死体験をして戻ってきたときに、キュープラロス女史に、自分の臨死体験を絵に描いて送ってくれたというものです。その子が描いた



絵というのが、極楽の国、天国があって、そこにガラスで出来たお城があり、その脇に虹がかかっていて、太陽が照っているというものでした。そして、説明してくれたのが、「見てみて！これが神様の国で、神様が住んでいるガラスのお城なのだよ！そして、太陽や星たちが僕を『お帰り』と言って迎えてくれたのだ。これが、僕がこれから行く世界なのだよ！」と女史に話してくれたというものです。私たちが帰っていく世界、「お帰りなさい」と迎えられるところが、その世界なのではないかと思えます。

卒業も同じようなことで、私の意識の中ではお葬儀や通夜を行うと言うときに、常にあることは、この人は、死んでいないということです。ここに間違いなくこの人は居らっしゃって、私が唱える経文も法話も聞いて居らっしゃるという確信があって、お葬儀や通夜を行っています。ではその人に向かって一僧侶として何を行っているのかをこれからお話ししたいと思います。

## 2. 三種の愛心（臨終にのぞんで起こす執着の心）

これが仏經の方で考える人が肉体の臨終に臨んでおこす三種類の代表的な心だと言います。ここで言う愛心というのは、愛情の愛ではなくて執着の心を言います。

### ① 自体愛（自らの肉体・身体への愛惜）

亡くなった自分自身の肉体に対する愛惜の情、「あの肉体に戻りたい」というような自分の身命に対して惜しむ気持ちです。

### ② 当生愛（未来に生じるところへの不安）

これから自分はどうなってしまうのか、これから自分はどこへ赴くのかというような不安です。亡くなったばかりの人、命というのは、非常に戸惑いの中にあるのではないかと思います。その人たちが、これから仏の世界、神の国に向かっていくにあたって抱く未来への不安を当生愛と言います。

### ③ 境界愛（家族・財産等、所属する境界に対する心配）

遺していく家族・親族を思う心配、これが誰でも最も大きいと思います。他にも諸々細かいことをあげていけば切りもないと思いますが、肉体の死に臨んで最も大きな執着する心は、仏教では三種類だということです。

## 3. 葬儀を通じて行うこと＝三種の執着を解きほぐし涅槃の世界へ

自分の身体はこれからどこへ行くのか、遺した家族への心配などに執着した人から少しでも三種の執着を解きほぐすために、多くの僧侶がそこで何をしているのか、それが葬儀や通夜の儀式です。

### ① 剃度作法（髪を剃り出家。仏・菩薩の系譜に連なる名



### 前の授与)

髪を剃って悟りの世界へ渡す作法です。まず、自らの肉体への執着を断ち切ってもらうことです。もし人が自分の肉体を惜しんで、そこへ帰れるのであればどんなに惜しんでもらってもよいのです。人間としての寿命が終わった後、またあの肉体に戻りたいといっても不可能なことなのです。ですから、そのときには「あなたの人間としての寿命はもう終わりました、あの肉体には戻れないのですよ」とはっきりと伝えていく必要があるのではないかと思います。その仏教的作法がこの剃度作法です。ここに私がお通夜のときに使用している剃刀があります。（実際に服部住職が儀式にご使用になる剃刀を見せていただきました）お通夜のときに、この剃刀を故人の遺影に向かって髪を落としていく儀式を行います。「あなたはこれから仏の系譜に連なっていく存在になっていくのです。人間としての修行は終わったのです」ということで、この剃刀で髪を落として、私どもと同じ出家をして仏の世界に入っていくことを伝えるのです。それと同時に戒名があります。戒名・法名をお付けするときには、その人の人となりを肉親や菩提寺の住職にお聞きして、その人の一生を背負ったお名前をつけます。その人の一生を象徴する文字をそこにこめて、「あなたの一生はこう言う人生でした。胸を張って仏の世界へ行って下さい」ということで、ご戒名をお授します。「どうか剃刀をして、出家をして、この法名をもって、仏の世界に旅立ってください」という心で自体愛への執着を解きほぐすために行うのが、剃度作法です。

### ② 読経・引導作法（赴く世界の説示。松明→荼毘）

私は天台宗の僧侶ですが、通夜や葬儀の場で読経する阿彌陀經は極楽浄土の様子を事細かに説いた御經です。肉体が死んだあと、そこにどういう仏様が来て、どういう風に連れて行ってくれるか、極楽の世界に行ったときの気持ちなど微に入り細に入り説かれています。私は、通夜や葬儀の場で読経しながら、まずこの言葉で仏様に極楽の世界を伝えて、同時にそこで見ていてくださる仏様に、一つには心の中で、その説いている御經の世界をみんな映像化して行きます。そして、亡くなった仏様に対してそのビジュアルライズした映像をもって、こういう世界だということを伝えて行くのです。肉体を離れた命というのは、肉眼では見えない世界、心と心を通して伝わっていくような世界を受け取る能力は非常に優れています。ですから、そういう人に対して映像化した世界を伝えて行くのです。先ほど竹内さんのお話にありましたように、興とか葬儀の儀式で飾るお花とか、儀式を荘厳にする祭壇とか灯りとかお線香とかお花とかそれらの全ては、お浄土の世界を象徴するものなのです。これから行く仏の世界が、まさにそこに表されているのです。ですから、これから行く世界については心配を捨てて、仏様に身を委ねて浄土の世界向かってもらうように確信をもってお伝えします。これが、儀式の中で行っている当生愛に対応するものです。

### ③ 支え合う姿の提示（成仏＝本人の覚悟＋遺族の追善＋住職の供養）

お通夜や葬儀の席でお伝えするのは、今の三つの愛心の

お話をします。「いま仏様は、こう言う状態にあります。それに対して私はこういうことをしました」そして、お集まりいただいた遺族の方に、「境界愛の執着を解きほぐすお仕事をするのは、皆さんしかできないのです」と言います。ではどのようにして伝えられるのかと言いますと、通夜・葬儀という非常に大変な場をお互いが支えあい、乗り越えていく姿を故人に見せることなのです。心身ともに疲労の極にあっても遺族同士がお互いに支え合い、労わり合っている姿を故人に見てもらおうことで、故人はどんなにか安心できるのではないのでしょうか。お通夜は夜を通すと書きましますように、昔は故人の枕辺に寄り添って、一晩中灯明を絶やさずに故人を偲びながら思い出話をして過ごしました。これがお通夜の始まりかと思えます。そして、もう一つは、仏様が生前持っていた徳を称える・感謝をするということです。言葉でも良いし、心で伝えても良いのです。これが出来る強い力を持っているのは、遺族の方だけだと思います。次に成仏するには？ですが、まず、私の考えの中では、人は死なないということです。肉体の死は魂の死ではない、命の死ではない、肉体は息を引き取ったけれどもその後、魂は元いた世界へ戻って行くのです。その帰っていく卒業式みたいなものが、通夜・葬儀にあたり、私たちが出来ることなのです。その仏様が浄土の世界へ向かって行くのにどういう風になっているのか。それが、成仏＝本人の覚悟＋遺族の追善＋住職の供養です。人間ですからどんな人でも、間違いを犯さずに生きていくことはできません。肉体を離れたあと、そういうものがまざまざと蘇ってくるのが命ではないかと思えます。極楽に向かって行く命、その一步一步の極楽への道すがらその魂は何をしているのかというと、自分の人生の総括をしているのです。過ちへの反省とか、逆に良く出来たことへの誇りとか一つ一つ思い起こしては総括し、一步一步進んで行くのです。そして、それを応援するのが私たちであって、二番目には遺族の追善です。仏様の生涯を振り返って二つあります。仏の人生への感謝と、謝罪です。仏様に対して、あなたがいてくれたから私はこうできた、あなたが言ってくれた言葉にこのように救われたなど、一つ一つ思い出しては、「ありがとう」ということで、仏様の極楽への旅路を前へグッと進めるのです。そしてもう一つは、「ごめんなさい」です。あのときには言えなかったけれども、あなたに対してこのことを謝りたいということが必ずあると思えます。「ごめんなさい」という言葉を送ることで、仏様は、またグッと極楽への一步一步を前進するのです。そして、それにプラスして菩提寺の住職が葬儀のときにあげる御経、あるいは本堂で毎日唱え続ける読経の功德（私は葬儀が終わった後、四十九日の法要がすむまで、戒名の名を読み上げて読経をする）を手向けて、「一日も早く仏の世界へ往生してください。仏の世界へ行かれたあと、仏様として私たちを導いてください」という願いを込めて読経しています。仏様の成仏というのは、まさにこの三者が一体になって行われるものです。それは、仏様が一人で勝手に浄土に行くことでもなく、遺族が涙することがお葬式でもなく、お坊さんが御経を唱えたり、儀式を行うというのは、何も意味のないことではな

く、ましてお焼香の間のBGMでもありません。この三者が一心同体になり、一つの方向を目指して行うのがお通夜であり、ご葬儀なのです。

#### 竹内さん追加

葬儀の今と昔の大きな差異は、地域社会の協力体制の有無です。私が現役だった頃の昔は、葬儀は隣保班（葬儀が発生するとサラリーマンの人は会社休んで葬儀のお手伝いをする）が全部仕切って、すべて精算までしました。今は、隣保班の人が関与していない地区が多くなり、葬儀代金を支払わなかったり、月賦でお願いしますと言ったりで、支払ってもらえないケースが年間20件ほどあります。昔は、一切このようなことは、ありませんでした。

また、いつの間にか繰り上げ法要が始まり、初七日を葬儀と一緒にしてしまうことが多くなりました。全国的な傾向です。これが是非かは私にはわかりませんが、極端な例は四十九日の法要までしてしまう場合もあります。

もう一つには、葬儀の打ち合わせに行くと、まず、葬儀代金を負けてもらえないかと聞かれます。昔は絶対なかったことです。それとはまた反対に、私が心を痛めているのは、葬儀社の方で、消費者の方が分からないうちに事を進めてしまい、精算時にトラブルになる傾向にあることです。そのことで、私は深く反省をして、事前相談会をして啓蒙活動を始めています。葬儀に関係しようがしまいが、一応知識・知恵として皆さんに覚えておいて有事の際に役立ててもらいたいと思っています。

**服部さん追加：**今竹内さんのお話を聞いて思うのは仏様が成仏するには、三者が一体になってはじめて可能になると言いましたが、それに心ある葬儀社の方が加わり、力を添えてくれたらどんなにか儀式が良いものになるだろうかと感じました。

**【質疑】**（解答：〔H＝服部、T＝竹内〕）

Q：お寺さんでお金をまくのはどうしてですか？

H：葬列の一つで、竹かごの中に色紙でくんだお金を入れ、これを撒いていくものです。これは、極楽の世界に降っている花を模してお浄土に行くことを象徴しています。また、お浄土に行くにあたっての最後の布施行、この世界の人達に、布施（喜捨）という仏道の一番大きな修行を最後に仏様にしてもらうために行うものです。



Q: そのお金はずっと持っていて良いものですか?

H: 大金が入っているわけではないので、嫌でなければ、故人のご縁のものとしてお持ちになってお守りにするのは、良いことだと思います。

T: 葬儀は仏教を原点とした考えで、その地区の習俗習慣によるもので、これがだめだということはありません。昔は、花籠といって地区でみんな編んだものです。地区によっては孫の数だけ作ったと言います。縁起のお金なので、隣組の人たちは、競って花籠から振られたお金を拾ったものです。

Q: 嫁ぎ先は真言宗、実家は曹洞宗ですが、両方とも遠くです。家の近くには天台宗しかありません。子供には何と言ったらよいでしょうか? 私たちとしては、天台宗にしたいと思ったのですが……。

H: 本宅の菩提寺に行って、そのご住職と何らかの関わりがあるのであれば、一度、連絡を取るのが良いと思います。

Q: 二人ともしっほ(末っ子)の方なので、関わりは特にありません。

H: 仏壇の方でご両親・ご先祖のご位牌をお祀りしているが、自分たちとしては独立して、新しいご縁を作りたいというのであれば、今信頼できるお寺さんをお願いするのは、良いことだと思います。

Q: 今、私は62歳で高崎井野町に住んでいます。今までたくさん葬儀に出てきましたが、今は、隣保班の人みな高齢化が進み、葬儀をお願いすることは出来なくなっているのが現状です。そこで、どの地区でも葬儀屋さんが増えたように思います。

今日服部さんの話を聞いて、祭壇をなぜ作るのか、お花をなぜ飾るのか、灯明をなぜ灯すのか等を含め、お通夜・お葬儀の儀式の意味を初めて知りました。今まで、このように葬儀について説いてくれたお坊さんに遭遇しませんでした。本当に良かったです。

先ほど、竹内さんが無宗教なんてないと言いましたが、私は無宗教です。今も自分の葬儀は無宗教で出したいと思っています。いずれお世話になると思うので、どうしたらよいでしょう?

T: 隣保班の件は、葬儀屋としてはすべてに関して人材を派遣しています。無宗教ということですが、宗教ということの解釈だと思います。〇〇宗、〇〇教ということではなく、人が生まれ、死に行くということへの畏敬の念とか、自分を生んでくれた親や祖先に対する敬いの気持ちが宗教心だと思いますので、無宗教という人は居ないと思います。死者を弔い、尊敬する気持ちは立派な宗教心の表れです。人や立場によってはかなり派手で豪華に葬儀をすることもあります。それは、死者の立場や功績、権力、権威を誇示するための手段で、大切なことは、心の問題だと思います。

H: 宗教心というのは、仏像やキリスト様を拝んだりすることではなく、自分の心の中にある何かを大切にすること、気持ちを、仮に宗教心と呼んでいるのです。音楽が好きな方は音楽が、お花が好きな方はお花が神様になる

かもしれません。そこから、今日のテーマの自分の最後をデザインするということに入っていくと思います。自分にとって今大切に思うものを通して、旅立っていくということがあっても良いと思います。その世界へ帰って行く時に、人によってはお坊さんが必要な方もいるし、そうでない方もいます。宗教心という言葉で大きく言っていますが、それは、必ずしも仏教とかキリスト教とかということではなくて、そのときに自分の心の中で、一番大事なものであるという理解の中で、自分の最後をどのようにデザインして行こうかということが、許されるようになって来ているのが、最近の傾向です。

Q: 年忌を続けているのですが、最近の忙しい世の中、反って迷惑に思われているのではないかと心配です。

H: そんなことはありません。仏様のご慈悲で、ゆかりのある方たちが、元気な姿で再会する機会を与えていただいているのです。

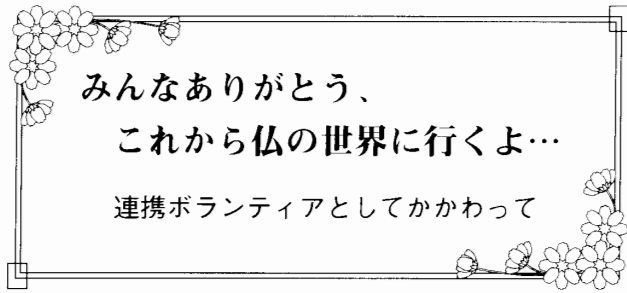
Q: 戒名のお値段は、どうなっていますか?

H: お布施が全てですが、これは、協会や寺院という宗教施設を維持・運営していくものです。ですから、お戒名に対して、あるいはお葬式の御経に対してという形で、お預かりしますが、それが即すなわち対価とか代価ということではありません。先ほどの花籠のように、故人あるいは縁者の方がお布施という行をさせていただいて、いただいたお布施を今度は宗教者が、寺院を運営しながら例えば人に法話を生かしていくという循環をしているわけなのです。それと同時にお坊さんの家族を養い、次の世代へ伝えたり、お寺をきちんと維持していくということに、社会的な公共性という意味があると思います。

Q: お布施でランクがあると聞きましたが、戒名の院号はどのようにして決め、また付けますか?

H: 私の場合は、お寺の維持・運営にご協力いただいた方には院号をお付けします。その方々とはどのような仕事をしているかと言いますと、自分の日々の時間を割いて、例えばお寺のお掃除をして下さったりしています。そういった積み重ねられた時間というのが、何もしない他のお檀家さんとは違うというふうに理解しています。それで、普段のお付き合いの中で、そういった方には院号という戒名をお付けしています。お寺が出来てからの感謝だと思っています。また、全く奉仕をしてなくて院号が欲しいという場合は、金額でこのくらい納めてもらえますかということで、お話しします。これは、夫々お寺さんによってまちまちで、お寺さんの歴史の中で、積み重ねられているので、過去の例を参考にお示しするのではないかと思います。(他の質問は、紙面の都合で割愛させていただきました)





暑い夏の日、私は繁山さんの後について車を運転し、2 kmほど走り、N医院の駐車場に入った。この医院は内科を看板に、市のほぼ中央部、住宅の密集する地域にあり、先代の医師が亡くなった後を息子さんが継いで、開業している。06年4月からの医療法改正で、在宅療養支援診療所の資格を取り、往診に対応した診療を行っている。

渡辺さんが退院を決意し、在宅で療養しようとした際、繁山さんは以前からの懇意で、在宅療養支援診療所の資格も持っているこの医院を紹介した。若い医師も快く引き受け、当面、通院での診察と薬の処方をするようになった。

渡辺さんは兼ねてから肺に持病があり、前橋の中央部にある大きな病院に入院していた。病状がなかなか快癒しない中、7月初め頃改めて検査をすることになった。ところが、その検査の結果、驚くべきことが医師から伝えられた。「がんでステージ4」だというのである。

それを聞いた本人も、家族も青天の霹靂、仰天した。これまで、安静にし、薬を飲んでいれば完治しないまでも、日ごろの生活はできるようになるとばかり思っていたからだ。

ところが、医師から伝えられた言葉は、冷酷にも余命があとわずかだという。

渡辺さんは愕然とし、一時は病院の窓から飛び降りようかとも思うほどのショックを受けた。80余年の人生で、こんなことは初めてのことであった。一晩中まんじりともできず、途方に暮れた。翌日、渡辺さんは、日ごろから、市の慈善団体で知り合い、懇意にしていた繁山さんに電話して一部始終を話し、「家に帰りたい」旨を悲痛な声で訴えた。そこで繁山さんがN医院を紹介すると同時に、話し相手のボランティアにと私のところに連絡をくれたのだった。

家に帰って、病院とはまったく違う、ゆったりし、落ち着いた気分になり、自由な生活を満喫した。ゆっくり散歩に出歩けるほどで、N医院にも娘さんの運転で二週間ほど通院し、点滴を受けたが、ある日、帰宅後発熱してしまった。直ぐにN医院に戻ったが、医師は夏休みの家族サービスの予定が入っていて、外出した後だった。かかりつけの医師も、土曜日で留守、仕方なく前にいた病院に電話し、診察してもらった。肺炎を起こしていると言われ、入院することになってしまった。しかし、渡辺さんの「家に帰りたい」という気持は収まらなかった。奥さんにも、娘さんにもそのことを伝えた。なんとかお父さんの願いをかなえさせてあげたいと家族は切実に思い、再度、繁山さんに電話した。

本人と家族の思いを受け止めた繁山さんから再び電話があった。「何とか在宅で支えてあげたい、何とかならない

だろうか・・・」。私は知人の訪問看護師さんに電話、事の次第を話した。その在宅療養支援診療所はいち早く対応し、渡辺さんを病院から退院させる手立てを手際よくとってくれた。

渡辺さんは家に帰り、また、玄関を開けると直ぐの居間にデンと腰を下ろし、来訪者を迎えるいつもの生活スタイルになった。

繁山さんのご主人は十数年前、在宅で一生を終えた。がんで余命幾ばくもないと知らされたとき、子供のいなかった夫婦は、最期まで自分たちらしい一生を共に居たいと思い、在宅を選んだ。当時は今よりももっと、がんを患っている在宅療養など難しいと言われた時代である。家のドアは常に無施錠にし、いつでも知人、友人が訪ねてこられるよう開放した。在宅療養にとって、必要なのは、医療的サポートしてくれる医療従事者のみなさんの力と同時に、患者やその家族を支える友人、知人などのボランティアであることを繁山さんは経験的に良く知っていた。

私の渡辺家訪問は週に一度のペースで続けた。はじめは渡辺さんも生い立ちや昔の思い出などを話してくださったが、次第に昼間起きている時間が短くなり、昼夜逆転の生活サイクルになってしまった。だから、家の者は一晩中お相手を余儀なくされ、疲労感が募ってきた。夜のコンサートと称して、ナツメロや唱歌、童謡などのCD、はたまた仏教の経典、仏教音楽などを聴くのだ。折から、大学の夏休みに入った孫娘が介護に参加、態勢は奥さんと二人の嫁いだ娘さん、孫娘二人という布陣になった。そこに介護保険利用によるヘルパーさんと繁山、土屋のボランティアが加わった。

もしかしたらお盆まではきついかもしれないと思われていた渡辺さんは、家という場と家族とに囲まれた自分らしい環境の中でおどろくべき生命力を発揮した。

いつも、酸素吸入を始めた苦しい息のときも、「ありがとう、ありがとう」と言った。

この間に渡辺さんは、恩義ある方々に芳志をするよう家族に指図したり、おそらく、自分の命が残り少ないことを悟っているような行動をとった。

9月はじめ、敷島公園に行ってみたくて家族に言った。みんなその願いを実現してあげたいと思った。介護タクシーの手配など、訪問看護師のAさん等が手早く段取り、思いは実現した。総社神社の方まで足を伸ばすほど気力はしっかりしていた。思いがかなって翌週、渡辺さんは住み慣れた我が家で家族に囲まれ生涯の幕を下ろした。家族には深い悲しみはあったが、充足感に似た温かい安堵の気持ちに包まれていた。 土屋記



## グラフ

## ボランティア便り

西群馬病院緩和ケア病棟 07. 7月～07. 11月まで

病棟の庭にある木々もすっかり葉を落とし、落ち葉との戦い、清掃も一段落し、日一日と寒さが増してまいりました。

私たちボランティアの活動も、毎月の出演者をはじめ、多くの方々の協力と支援を受けながら、定期活動を始めて2年半が経ちました。常時定期的に活動している方も増えました。まだ紹介していなかった方々を紹介します。女性では赤山さん、石坂さん、高橋さん、土屋さん、そして男性では長柄さん、一戸さん等が加わり、にぎやかになりました。

毎週、看護師さんからのボランティア連絡簿により、病室内での患者さんとのベッドサイドでの会話、車椅子での散歩介助などをします。患者さんは年配の方が多いので、長年社会で積み重ねてきた知識や教養を身に付けておられます。私たちは患者さんとお話の中で、これらの方々から教えてもらうことが数知れません。病を患う人にしかわからない思いや心情をお聞きすることもあります。ある男性の患者さんは、「生きていくことも大変だが、死にいくこともたいへんだよ」

と。また、別の方は「病人という職業は楽ではないよ」と、いずれも微笑みながらこころの内を話してくれます。病を受け入れ、緩和ケア病棟で日々を送られている方々のほんとうのところが伝わってきます。

ある女性患者さんに、「最近物忘れが多くて・・・」という、「忘れるということは、新しいことを詰めるための自然現象よ」と私に救いの言葉で励ましてくれました。

緩和ケア病棟の患者さんはもちろん、病棟に関わるみなさん、心の温かい優しい方ばかりです。私はこの病棟でボランティアをさせていただくようになって、私自身がすごく変わったような気がしています。地位や身分に関係なく、自然で何も求めない過ごし方、生き方に幸せを感じています。

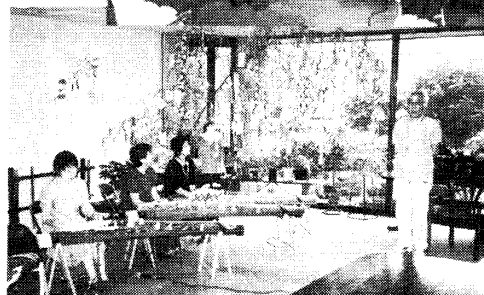
「梅檀(せんだん)の林に入る者は、染めざるに衣白から芳し」ということわざのように、みなさんの仲間としてボランティアをさせていただけることに感謝しています。

(佐々木 記)

## 7月 ヒタまつり



浅見智恵子さんとお仲間の琴演奏



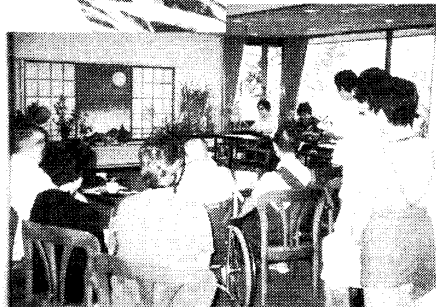
短冊には患者さんのねがいやお孫さんの絵も

## 8月 夏祭り

風鈴、スタレにノレン  
夏の風物詩を演出実習の学生さんとも  
参加して綿菓子と  
カキ氷の出店

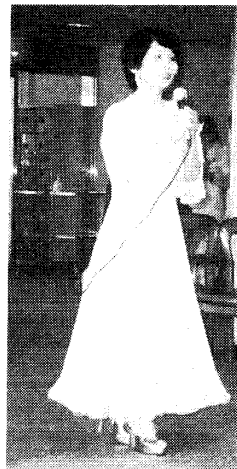
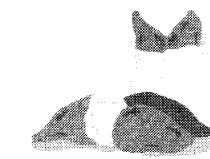
夏祭りの雰囲気をみんなで楽しむ

## 9月 お月見

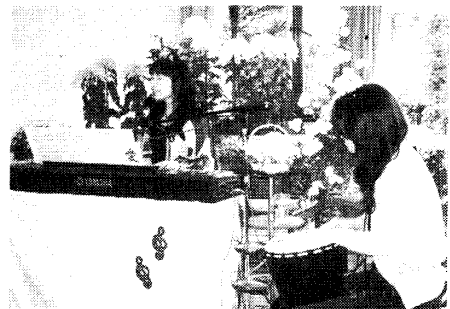
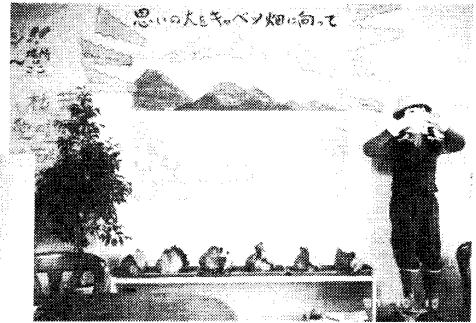


大正琴の岸正恵さんの  
グループと  
シルバーコーラスの  
みなさん

## 10月 収穫まつり



シャンソンを唄う  
関志津子さん

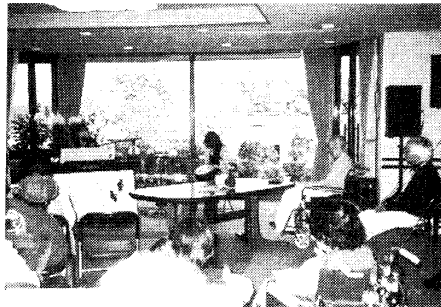


西田雅子さんのピアノ弾き語りは心にひびく...

## 11月 菊の香まつり



菊の花は伊勢崎の渡沢賢二さんの提供

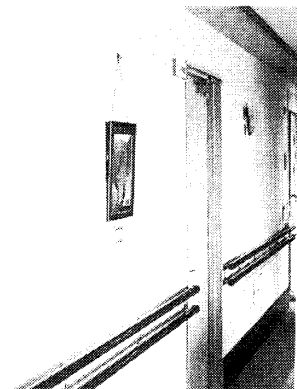


みんなで歌った「見上げてごらん夜の星を」

## 緩和ケア病棟ギャラリー

廊下の二か所はいつも、写真の展示ギャラリーになっています。季節感と情緒ある写真が展示され、患者さんご家族、スタッフのみなさんの目にとまり、一時の癒しに役買っています。

写真の提供者は、渡沢賢二さん（伊勢崎市）、塩野満衛さん（前橋市）、河井康夫さん（高崎市）です。渡沢さんは、日本各地の主に花、景色の写真。塩野さんは、小鳥の写真。河井さんは、外国の観光地の風景、建築物、日本の山の景色、各地祭りの情景など幅広くさまざまな写真です。



# 私は今もこうして私らしく生きている

## ～関口秀子さんのお話～

西群馬病院・緩和ケア病棟から

### 秀子さんが昨年職場退職時に皆さんにお出した挨拶状

梅の香も芳しい頃ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。私儀このたび1月末をもって、富士重工業を退職致しました。38年間の勤めを無事終えることができましたのも、多くの人達に支えられての賜です。ありがとうございました。

現在は再発の病との格闘3年目です。敵もなかなかで、(私の身体が住み心地よい?) 退散してくれません。今は車椅子で入院後の生活ですが、夫を始め多くの人達に支えられ、感謝いっぱいの毎日を過ごしております。

私の退職後の夢は、お世話になった方々や地域の人達の知恵や腕を持ち寄って、自宅で気兼ねなくお喋りなどできる「集いの場」を開くことでした。そこで今回、私の様々な貴重な体験が皆様のお役に立てばと、「秀子の部屋便り」?を内外に発信予定です。この「集いの場」を「面白そう」とお思いの方、ご連絡・ご来訪大歓迎です。お待ちしております。

では、皆様くれぐれもご自愛くださいませ。そしてこれからもよろしくお願い申し上げます。

平成18年3月吉日

[メールアドレス]

携帯 : h.s.08050409697@ezweb.ne.jp

自宅 : seki-sh@sunfield.ne.jp

### 秀子さんのお話

11月28日、病棟ボランティアの日に「話し相手」と依頼され、訪室したのが関口秀子さんとの最初の出会いです。満面の笑顔で迎えられ、すぐにこれまでの体験を語ってくれました。勧めてくれたジュースを、一緒に飲む時に、秀子さんが元気な声で「出会いに乾杯!!」と言ってから「私が思っていること、この病気になって考えたことを一人でも多くの人に発信したい。それが私の夢のひとつ」と、話されました。そこで、今回この会報「ねがい」を利用してもらって、皆様にも秀子さんのお話を聴いていただこうと思います。秀子さんが話されたことを繋ぎながら、このような形にしていきました。

現在60歳。19年前の41歳の時に検診で乳がんが見つかりました。左乳房とリンパ節切除をし、その後毎年検診を続けていたのですが、15年後に再発をしました。初発の手術後も職場復帰をし、仕事を続けていましたが、再発の症状(咳、呼吸苦など)がひどくなり、胸水穿刺をはじめとする再発治療のために入院となりました。この時の入院は2か月間。乳房のない胸の胸膜に直接抗がん剤を投与するという過酷な治療でした。焼けるような胸の痛みを始め、副作用にこれまでにない苦しみを体験しました。

「再発は治らない」とは聞いていましたが、それでもまだ、この時点では自分にはピンと来なくて、そんなふうには思いませんでした。

無防備でした。根拠はないけど、「私は大丈夫」と。ちょうど、世の中にこんなに交通事故があるけど、「自分は大丈夫」と思うような感じです。

発病してからも仕事を続けていたのは、病気のことばかりで頭がいっぱいになるよりも今迄通りの生活をしていった方が良かったと思ったからです。発病して、最初の手術、治療の時はただ、もう何が何だか分からない



まま、時間が過ぎました。今思えば、そのときから病  
気、治療に関する情報はとても少ないものでした。医  
師から言われた治療を受け、出された薬を飲み、決まっ  
た検診を受けていただけのようでした。

再発と分った時に自分に有効な抗がん剤は5種類。  
その一つを選択しましたがひどい副作用で今日までの  
間、何度も入退院を繰り返してきました。この長い闘  
病期間を経て、今思うことの第一は、私達ももっと賢  
い患者にならなきゃだめだという事です。医者任せに  
せずにもっと自分でも色々調べ、知って、疑問を持ち、  
質問して、納得した上で、治療を受けなければいけな  
いと強く思います。自分の事なのです。自分の命の問題  
なのです。私も以前は何も知らない、知識もありません  
でした。それに、与えられる情報量がとても少な  
かった。薬についても先生は「これしかない」と簡単  
に言います。でも、海外での薬とか、新薬の情報を、  
だめでも一応聞きたかった。選択肢を持ちたかったの  
です。薬については息子が製薬会社の研究室に勤務し  
ているので調べてもらえましたが、患者にとって、病  
気、治療に関する情報はどんなものでも欲しいという  
ことを先生ももう少し分って欲しいです。自分のこと  
だから、自分でも考えて、一番良いと思う方法をいつ  
だって選びたいのです。

また、副作用でひどい苦しみを味わって思う事は、  
症状緩和に対しての専門医がいて欲しいということが  
あります。余りの苦しさで死を考えたこともありまし  
た。再発してから4年は入退院を繰り返していますが、  
自宅での療養のため、家を改築し、バリアフリー  
にしました。車椅子で動けるようにしています。副作  
用で、味覚も麻痺、手も思うように動かない状態でし  
ましたが、何とかやってきました。我が家は両親と私達夫  
婦、息子と娘の6人家族です。夫は私の介護のために  
予定より早く退職してくれました。私は5人姉妹です  
が、姉妹がいつも力を貸してくれています。私が病気  
になったからといって、家族全員がしょげていても仕  
方ない、できる限り、出来る事はやり、今までのよう  
に暮らそうという思いが自分にはあります。少しでも  
調子の良い時を見計らって、やりたいことを出来るだ  
けやってきました。自宅のリフォーム中には温泉療養  
と称して、伊香保、草津、軽井沢など、夫や姉妹夫婦  
らと何度も出かけていきました。湿っぽくしてたく  
はない、出掛けて行くのもリハビリと思って、出来る  
だけ前向きに考えて過ごしたいと思いました。そうい

う私を家族は良く分ってくれています。家族ぐるみで  
私の病気に対してチーム編成をしているような感じデ  
す。とてもありがたいし、何よりも力の事です。

以前から私は診察に行く時には質問事項を書いて、  
少しでもわからないことや納得のいかないことは解る  
まで聞いてきました。先生にしてみたらうるさくて嫌  
な患者かもしれないけど、家族はそういう自分を理解  
してくれています。この20年間、私のやり方を支持し  
てきて、応援してくれています。病気になったことは  
残念ですが、何もしないうちにあれよ、あれよと時間  
が過ぎて死んでしまうより、事実を知った上で、した  
い事や、あとに残る者の事も考えてやっておくことが  
出来てよかったと、今は思っています。

私は元来明るいし、元気が良くて、姉妹の中でも何  
でも音頭を取って旗振り役をしていました。何か提案  
して、「この指とまれ」と言えば、姉妹でも友人でも  
いつも集まってくれていました。だから、私が5人姉  
妹の中で楯になってよかった。他の姉妹だったら可哀  
想で見えていられないと思います。こんな辛い苦しい思  
いをするのは、楽天的で気持ちの元気な私でよかった  
と思っています。

私が一般病院からこの緩和ケア病棟に移った理由は、  
症状が一向に改善されないのもありましたが、私がも  
う少し、あと、半年でも生きられるのなら、このまま  
の状態が終わるのではなくて、私が私らしく生きられ  
る場所に移りたいと思ったからです。「ホスピスに入  
りたい」と家族に話し、資料を取り寄せてもらいまし  
た。夫と娘、姉が面談に行ってくれ、入ることが出来  
ました。このままじゃ嫌だったんです。何も出来ない  
まま、ただ、ベッドに寝ているだけで死んでしまうの  
は嫌でした。

「私が私でなくなっちゃう」と思いました。  
ひとつでもいいから私らしく生きたいのです。

ここに移ってから病室の窓から外を見ることが出来  
ます。緑や風の吹いている様子を見るだけで、私は生  
きているって感じます。

外の景色を眺め、空の夕  
焼けを見て一日の終わりを  
感じる、そんなことが  
とても嬉しいのです。こ  
こへ来て本当に楽になり  
ました。食べられるよう  
にもなりました。それか



ら、色々話せるのです。看護師さんも先生もよく話を聴いてくれます。自分の吐き出した言葉をここでは吸収してもらえます。受け入れられるという実感が持てるのです。先生は毎日部屋に来て、しゃがんで私の目線で、「今日の具合は?」と聞いてくれます。そして今日の目標、次の目標と一緒に考えてくれます。再発してからずっと副作用で苦しかった私はなかなか先が見えませんでした。ここでは目標を現実のものに変えていけます。全く食べられなかった私が重湯から5分粥に変わりました。何年も歩けなかったのが昨日から歩行訓練を始められるようになりました。こんなに変わるなんて思いもしませんでした。たぶん「ホスピスに行きたい」という夢が叶ったことと、環境のすばらしさが私を助けてくれたのでしょう。それから家族が後押ししてくれています。

私は生きるためにここに移りました。ここでは色々な人達に支えられている実感があります。だからなおさら、生きようと思えます。少し前に私は角膜移植のドナー登録を済ませました。私自身がいなくなっても、これから後の人に何かの役に立ちたいと思ったからです。

今でも、何か人の役に立つことがしたい。一日一日、自分の出来ることを見つけないと思っています。この部屋にいても何か出来るような気がします。色々な人とお話しすること、家族と過ごすこと、外を見て自然を感じる。もう少し歩けるようになったらボランティアさんのお手伝いとか、私はお料理が得意だから、看護師さん達に何か作ってあげたいです。

気持ちの持ち方次第で一日がどうにでもなります。前向きに、明るさを失わないのが薬かもしれません。そして何よりも、私がここまで頑張れたのは、今まで、今も、いつも一緒にやってきてくれた主人がいてくれたからです。私は今も生きています。ここで私らしく今日も生きています。



みなさんに支えられ、いつも前向きに笑顔でがモットーの秀子さん

秀子さんのお話を伺っている間、ご主人も同席してくださいました。私はいくつかの質問をさせていただきました。「これまでの秀子さんを一番近くで見て来られてどんなことを思いますか」

ご主人は答えられました。「頼もしいと思います。それから、誇りに思う。選んでやってきたことは間違いない。今までずっと一緒にやってきて、苦しい時の事もわかっているから、ここへ来てからの状態はまるで奇跡のようです。ホスピスに対する思いは本人と家族とは違うところがあります。家族としては現実の厳しい状況は頭では理解できていても、やっぱり、いくらかでも何かまだ出来ることがあるかもしれないと思うのが本音です。その部分でホスピスという選択肢を受け入れるのには時間が必要でした。でも、ここに来てから本当に変わって、しかも良い方に変わっているから信じられない感じです。留まっているのではなく、少しでも進むことで、ここにたどり着けたのだと思います。」また、介護中のご主人自身のストレスに対して「家族のケアなんて誰も何もなかった。病院で話せる人もいなかったし。そうかと言って本人に当たるわけにもいかない。辛い時は何度もありました。それでも、家内の姉妹が良く手伝ってくれているので、助かります。私のために付き添いのローテーションを組んでくれてきました。病院に家族の精神的なサポートもしてくれる仕組みがあれば、もっと良くなるのじゃないかと思いました。」

秀さんは抗がん剤治療終了直後の、激しい副作用の続く中、NHKホールで患者さんの立場から発言をされました。



NHKテレビ放送番組

## 「第2回がん患者大集会」 における発言

乳がんで左乳房リンパ節切除から16年目で胸膜に再発、肝臓に転移という状態でタキソテールを服用、副作用に苦しむ。今後、さらに、副作用の心配のあるT S-1、ヒスロンH200を服用予定という状態で、患者の

切実な声を是非とも聞いて欲しいという思いを持ち、番組に参加されました。

外国で承認されている「未承認薬の早期承認を実施し、再発患者に対する治療薬の選択肢の幅を広げて欲しい」を訴えました。再発患者が「悔やみながら死を待つのみ」の状態を少しでも改善して欲しいという思いを強く抱いてのことでした。

### 主治医の小林剛先生のお話

関口さんが何故、こんなに状態が落ち着いてきたか、僕達もびっくりしています。まだ、転院されてから一週間程ですが、ご本人も言われているように、環境の変化が精神的な安定を与えたことが大きいと思います。暗くて長いトンネルの中から、ようやく抜け出して、この緩和ケア病棟に移ったことでひとつの小さな光が見えてきたとしたら、スタッフにとっても、大きな喜びです。嬉しいですよ！関口さんのように患者さんの改善を眼にすることが出来るのは本当に嬉しいことです。

この、緩和ケア病棟という空間の存在意義を考えます。逝く場所か？生き続ける場所かどちらか…？僕としては「生きるために」来て欲しい。もうやる治療は何もないから入るのではなく、生きる場所のひとつとして選択していただきたい。関口さんはこちらに來られた時は嘔吐、嘔気にとでも苦しまれていました。それでも、病室で「何かしたいことはありますか」と最初に尋ねた時に、なんと「外泊したい」と答えられました。いきなり外泊というわけにもいかず、近い目標から一緒に設定しました。まず、歩行訓練。今では、毎朝9時半頃になると、病室のドアを開け、そわそわとナースセンターに顔を向け、「私のリハビリはまだ？」と、言いたそうにされています。彼女の、生きる意欲に圧倒されます。リハビリも一生懸命され、念願のご家族との伊香保温泉旅行は来週計画されています。数年ぶりに歩く姿を皆さんに見せて笑う彼女を想像すると、こちらまで嬉しくなります。

いつも患者さんに出会えて感謝の気持ちでいっぱいです。この緩和ケア病棟を選んでいただいたこと、そ

して、僕達がその方が生きていくうえでのお手伝いをさせて貰えるなら、本当にありがたいと思います。関口さんには僕達の方こそ「ありがとう」です。

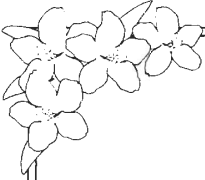
### 追記

原稿を書き上げて最初に秀子さんに読み上げて聞いてもらった時、「うわ～、何だかすごい優等生みたいで恥ずかしいなあ！私は田舎の何処にでもいるような普通のオバちゃんなのに」と、言われました。出来る限り秀子さんご自身が使われた言葉をつなげたつもりですが、話す言葉と文章とではどうしてもニュアンスが違ってしまったり、何より私の作文能力の限界がありました。

秀子さんは本当に気さくで話やすく、良く笑う、愛想の良いオバちゃんなのです。この文章から優等生っぽい印象を受けたとしたら私の至らなさですのでどうぞご勘弁ください。普通のオバちゃんが語ってくれる命のお話を少しでも多くの人に分かち合いたいと心から思います。一人の力はとてつもなく、大きなもの…

(文責) 吉本明美





## 最愛のわが娘を亡くして思うこと



高崎市 森 上 彩 子

### 突然の発病

ある日、友人と買い物をした外出先で、突然意識を失い、病院へと運ばれました。日を改めて詳しい話を聞くために病院へと向かいました。そこで検査で、思いもよらぬ重大な病気が見つかったのです。

二十七歳の秋、娘は「脳腫瘍」という恐ろしい病名を告げられました。体調も悪く、動きたくない日もあっただろうに、それをおくびにも出さず元気に仕事に出掛け、明るく接し、今思うと楽しい生活を演じていたのだと思います。

高度な専門用語を使って淡々と手術・治療方針を説明する医師の前で、質問の言葉も見つからず、ただ頷くだけが精一杯でした。信じたくない、認めたくない、これは夢だと心で叫びながら手術の同意書に印を押しました。手術は、お正月が過ぎてからという事になりました。今、思えばこれが娘の元気な姿で迎えることの出来た最後のお正月だったのです。

一月六日、第一回目、十時間という長い手術を乗り越えた娘は、その後の必死のリハビリを受け、何とか家での生活が送れるようになっていました。

ところが、手術より三か月後、「水頭症」を併発、再び入院を余儀なくされてしまい、落ち込んで泣き続ける娘を励ましながらの辛い病院の生活でした。「水頭症」の手術は予後も思ったより良く、持ち前の頑張りで自宅療養を続けて順調な回復を見せていました。

近くなれば友人とも外出したり、手芸や料理も出来るようになりました。

もっと元気になって、あれもしよう、これもしたいと楽しい計画を浮かべながら穏やかで静かな生活を取り戻していました。

### 無情な再発

しかし、運命は、そう易々と病魔の苦しみから見逃してはくれなかったのです。

最初の手術から、一年も経たないうちに、またも「脳腫瘍」が再発してしまいました。

良性から、増殖のスピードの速い悪性の腫瘍に変わっていたのです。画像検査の結果を見せて、もう手術をしても先は短いだろうと、人の死など慣れきっているとばかり、家族の動揺や、不安など関係なく一方的に全てを取り決めます。医師の威厳でもって押さえつけたような説得の末、何の知識も持たぬ無力な患者や家族は、手術を受ける最後の苦し紛れの決断を迫られました。この事態にあつては、ただ、医師を信じ、医師に全てを託すしかなかったのです。

しかし、周囲の組織に浸み込んだ手強い病魔は手術によってなおさら動きを活発にしたかのようにでした。娘は、いくら再発といっても手術の前日までは、それとは信じがたいほど良く喋り、病院から出る普通食を完食し自力歩行こそは困難にせよ元気な姿を見せてくれたのです。ところが、手術室から出てきた娘は、話すことも出来ず、目は腫れ上がり、口は閉じられず、自分の意志とは関係なく手足をバタバタさせてやむことなく、身も心もボロボロの状態でした。

医師の練習台と言いかねない無理な手術の結果か、手術をしなければ命が縮んだか、何をしてでもどれが最善で、どれが最悪なのか、大病院の医師の前で自分の気持ちなど何一つ言えないのです。

### ああ、後悔ばかりが…

もっと、冷静に考えていれば他に満足の行く選択肢があったはず。もう一步、もう一言の勇気と行動、もう少しの話し合いを求めていれば、どういう結果になったとしても納得も行くだろうにと、自分自身の不甲斐なさに、未だ、自責の念と憤りが消えることがありま



せん。

しかし、病人の執念というのでしょうか、娘は、何とかリハビリを重ね、最後の力を振り絞るように少しずつ言葉を発し、流動食から形ある物へと自力で食べられるようになり、車椅子介助をすると、軽い散歩にも連れて出られるようになりました。

### 奇跡よ! 起きて

奇跡よ、起きて!

私は、娘がこのまま回復するなら、自分はどんなことでもする。必死で祈り続けました。それが車椅子の生活であっても私の目の前で明るい笑顔を見せてくれれば何にでも耐えられる。頑張って生きて行こうね。娘に声を掛けながら、希望の光を見て、今までの苦しみなど全て消えてしまったようでした。

でも、その安堵は長くは続かず、最後に見せてくれた娘の健気な姿は、ある日突然の大きな痙攣発作によって一夜にして容態が急変したのです。

その日を境に娘は、笑顔も言葉も消えて悪化の一途をたどって行きました。

昇圧剤、輸血、栄養補給、人工呼吸の装着、真に体中、管に繋がれて必死に耐える娘の傍らで何をしてやることもできず、ただ声を掛け、手を握って母親の温もりを伝えることが私にしてやれる精一杯の方法でした。この期に及んで転院を、自宅療養をと、医療の研究において用済みとなった患者の家族に過酷な言葉を投げかける医師。動かせない状態の末期患者に対し、もはや人間としてではなく物として見る。その愛のなさに慥然としつつも自分の立場の弱さを思い知らされるだけでした。

娘は、意識の遠のく中で声も出すことも出来ず、何を言いたかったのか、何を訴えようとしていたのか、死の迫る我が身を感じて、その恐怖と悲しさはどんなに辛かったであろう。どんなに無念であったらと思うと、あまりにも哀れで胸が張り裂けそうになるのです。訪れる死を待つだけの日々、心身ともに疲労困憊する私の傍らに横たわる娘は、後一か月、後一週間と告知され、呼びかけても返事もせず、手を握っても握り返す力もなく、自力では閉じられぬ、うす日は、私を見詰めることもなく、娘は、一人、旅立ちの準備を始めていました。

### 終に力尽き

二年近くの間、日まぐるしく入退院を繰り返した辛い闘病生活の末、娘は、満開の桜を観ることも出来ず、



青々と若葉の活気付く頃に、体中管を繋がれたまま昏睡状態で別れも告げず逝ってしまいました。

せめて、もう少しの季節を共に過ごしたかった。心の底から母娘で話し合う時間が欲しかった。

苦しみ娘に、私は何をしてやれたのだろう。何を分けてやれたのだろう。

そして、何故、その体調の変化に気付いてやれなかったのだろう。

愛する我が子を、親が看取るという、あってはならない不条理な現実の中で、何をする気力も張り合いも失くし、いまだ自責の念と自己憐憫に苛まれ続けます。

### 今も娘を追いかけて

時に、娘の声を聞き、娘の幻覚を目にし、今すぐ娘のあとを追いかけて行きたいと心臓を握り潰されそうな煩悶に襲われます。

子供を亡くしたことで大きな罪を犯したように人の目や噂を恐れ、顔を上げて歩くことも出来ない日が続きました。

「時が癒す」などとはほど遠く季節を重ねる程に悲しみは増して、生涯癒えることのない傷の深さを痛感するのです。いつの日も私の手助けをして、信頼し、一番身近に居て私を支えてくれた子は、もう居ないのです。大切に育ててきたこの年月は何だったのか。将来の夢をいっぱい描いていたのに旅立つにはあまりにも早すぎる。お母さんは、貴女の花嫁姿も見ることが出来なかった。

片腕を(?)もぎ取られ、翼を剥ぎ取られたような不安な日々、残りの人生をどうやって生きて行くかも見つけ出せずに、寂しさと失望の中、一年半が過ぎようとしています。

(森上彩子は著者のペンネームです)

## 寄付のお願い

ご承知のように、本会は1988年、日本の緩和ケア医療の胎動期に発足しました。当時、緩和ケア病棟は全国で試験的に5か所、それが現在、国内には百数十か所の緩和ケア病棟ができるまでになりました。

本会も20年、さまざまな活動をしてまいりましたが、長年の懸案であった「がん対策基本法」が本年4月施行されたことにより、状況が大きく様変わりしてまいりました。私たちが願ってきた方向性はこの法律の趣旨に汲み入れられています。

がんに関する治療、ケアなど必要な情報の一元的集約と発信、より高度な検査、治療の推進、腫瘍専門の医師、看護師などスタッフの養成、抗がん剤、放射線など適切かつ効果的な適要に関するデータの蓄積などについて、県段階で対策協議会を組織して計画案を策定しようとする内容になっています。本会も協議会の中に位置づけられた、患者の声を施策に反映させるための「群馬県がん患者団体連絡協議会」のメンバーの一員として、思いを発言してまいりたいと考えています。

現在は、「死別体験者の分かち合いの会」「西群馬病院緩和ケア病棟ボランティア」「がん・介護相談」「交流会・勉強会」を主な活動にしています。今後とも活動の継続を図りたいと考えていますが、会の財政はたいへん窮迫しています。みなさまのご支援をお願い申し上げます。

同封の振替用紙にて、金額の多少に関わらずご支援いただければ幸いです。(代表 土屋)

### これからの「死別体験者の集い・分かち合いの会」予定

時間：14:00から16:00

場所：群馬県社会福祉総合センター

- 「死別体験者の集い・分かち合いの会」は毎月第2日曜日。
- 誰でも予約なしに参加できます。

| 月  | 死別体験者の集い・分かち合いの会 |    |       |
|----|------------------|----|-------|
| 1月 | 1月13日            | 4月 | 4月13日 |
| 2月 | 2月10日            | 5月 | 5月11日 |
| 3月 | 3月9日             | 6月 | 6月8日  |

★ 群馬ホスピスケア研究会通常活動資金のための寄付  
郵便振替 番号/00560-4-5287  
名称/群馬ホスピスケア研究会

**寄 付** ありがとうございます



(2007. 8～11月)

木村敬子さん、竹内 功さん、渡辺徳江さん  
服部順空さん、匿名

## 編 集 後 記

**暑** かった夏につづいて秋も暖かさが長引いてなかなか冬鳥が来るような気候にならないと気をもんでいたら、10月半ば過ぎには嶺公園にも北国からジョウビタキやオシドリがやってきた。異常気象でも彼らは季節の移り変わりを着実に読んでいるようだ。その反面、もうとっくに暖かな国に旅立っているはずの夏鳥のキビタキやコサメビタキが10月末日になってもまだ公園にいないではないか。しかも動きがにぶい。暖かすぎて帰るチャンスを見失ってしまったのかと心配していたが、次の日以降見かけないのでなんとか帰ったのかもしれない。あの小さな小鳥たちが季節の変わり目には北から南からと大海原を越えて行き来する能力はどこにあるのだろうと不思議に思うとともに、また来年も美しいさえずりを聞かせに戻って来てくれよと送り出している。(S・K)

「現代葬儀事情」のシンポジウムはパネラーの服部さん、竹内さんの話が分かりやすく、特に質疑応答ではみな似たような疑問を持っているのを感じましたし、明確な考え方をいただけて良かったです。一週間後に義父の33回忌を行いました。主人も義母も亡くなっていて(義父とは1年くらいしか一緒に過ごさなかった)ので義父のことはよく分からない私と子供とで執り行ったのですが、親戚も多く久々に会った人

達で法要後の食事は賑やかで盛り上がりしました。「法事は先祖が懐かしい人々を会わせてくれる」と前回聞きましたが、まさにそのとおりでした。無事供養ができて良かったです。

(T・F)

**緩** 和ケア病棟のイベントで、思いもかけず大きな声で歌う年配の患者さん。毎年、12月になるとモミの木を届けてくれる人。たった一人でも一年中、草むしり、植木の手入れをする人。殺伐とした昨今、このような人がいることがとても嬉しい。

(N・T)

**齢** 60にもなれば、数え切れないほどの葬儀に出ました。しかし、葬儀の儀式やそれに伴う行事の諸々の意味をきちんと説明を受けたのは、今回が初めてでした。まさに、目から鱗！これからの自分を含め身近な人の葬儀を考える上で、とても参考になりました。その「現代葬儀事情」を出来る限り忠実にテープ起こしをしました。皆さんに参考にしていただければ幸いです。

(T・T)

